

創世記 15 章 1-6 節

ヘブライ人への手紙第 11 章 1-3、8-16 節

ルカによる福音書第 12 章 32-40 節

先週、大雨と雷の中、教会全体が輝いたように見えたので、雷が落ちたようです。電子機器など特に異常はありませんが、数分間停電しました。コロナ禍だけではなく、異常な暑さもあり、また大雨の被害が、日本各地で出ています。大雨の被害にあわれた方々が、一日も早く通常生活に戻れますように祈りたいと思います。

さて、本日の旧約日課は、「創世記」にあるアブラムのお話です。まだアブラムと呼ばれ、アブラハムと呼ばれていない時代に、彼が「幻」の中で、主なる神様から祝福の約束を受けるお話です。「**主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。『恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。』**」（創 15：1）とある通り、主なる神様は、アブラムに対して、彼を守ること、そして彼に報いを与えることを約束します。「幻の中で」にある「幻」という言葉は、日本語の意味とほぼ同じです。つまり、実態があるかどうかはわからないが、見えるものです。そこから考えますと、「幻の中で主の言葉が望む」とは、視覚的と聴覚的の両方で、主の言葉が示されたことを意味します。すなわち、きわめて分かりやすい形で示されたということです。

しかし、アブラムは、その言葉を素直に受け取りませんでした。「**アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。わたしに何をくださるといいますか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです』**」（創 15：2）と答えるからです。7月17日の礼拝でも触れましたが、アブラムとサラとの間には、子どもがいませんでした。アブラムは、主なる神様から、守りと報いという約束を、わかりやすい形で受けるのですが、自分の前にある現実を直視すると、とても信じられないのでした。

アブラムの反応は、それだけではありませんでした。「**御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。**」（創 15：3）と言葉を続けます。つまり自分に子どもがないのは、主なる神様「あなた」の責任だと苦情を述べるのです。そのような不平を言える、主なる神様とアブラムとの関係も面白いですが、主なる神様は、そのようなアブラムに対して言葉をつづけるのです。「**見よ、主の言葉があった。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』**」（創 15：4）といずれ子どもが生まれること、そして、「**主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができ**

るなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』」（創 15:5）と、天を仰いで見せて、アブラムの子孫は天の星のようになるのと約束を示し続けるのです。

主なる神様は、「幻」を通して、アブラムに約束をしました。それは、聴覚的、視覚的の両方というわかりやすい形で示されたのですが、アブラムは、現実を見るがゆえに、その約束を信じられないのでした。それゆえに主なる神様は、星を見せて、つまり実際に見えるものを譬えとして示して語り掛け、約束が確実であることと告げます。実態はあるかどうかは別として、見える「幻」、そして、見えるが決して人間が到達することのない星、その二つの見えるものと、そして言葉を通して、神様は、アブラムに約束したのでした。

これらのことを通して、「**アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた**」（創 15:6）という有名な言葉につながります。「信じる」という言葉は、わたしたちの祈りの末尾の言葉であるアーメンと同じ語源です。確信、確実にする、固くするなどの意味があります。「義」という言葉は、法律的、裁判や判断の判決などが、正しいことを意味していますが、この段階では、まだ「律法」が与えられていませんので、主なる神様の前での正しさを示します。それゆえ、「**アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた**」（創 15:6）とは、アブラムは、主なる神様に対する思いを確実にして、主なる神様からその思いが正しいと判断されたということです。

このお話の結論だけに注目しますと、アブラムは何のためらいもなく信仰に入った、あるいは現世利益的な約束を受け入れて信じたようにも思えます。しかし、最初、アブラムは、現実を見るがゆえに、主なる神様の言葉を信じられなかった、という点を忘れてはなりません。アブラムは、主を信じながら、しかし、その主なる神様からの恵みである子ども・子孫を与えられないまま、その妻サラと共に、不安の中、また苦悩の中、生きてきました。それゆえ、突然、約束をあたえると言われても、急には信じられなかったのでした。それでも主なる神様は、見える形で、そして言葉を通して、わかりやすくアブラムに約束を示され、それは実体のない、天を仰いで星を見るという、雲をつかむような約束でした。約束の内容は、子孫を与え、その子孫が増えるという現世利益的なものですが、その約束の根拠は、現実的な実態のあるものではありません。しかし、アブラムは、勇気を出して、改めて主なる神様を信頼したのでした。それゆえに、その姿に、主なる神様を信頼するという「信仰」について学ぶべき事柄が示されていると言えるのです。

そのアブラムの姿は、まさに「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。**」（ヘブル 11:1）という「ヘブライ人の手紙」の言葉の通りといえます。「ヘブライ人への手紙」の著者は、このアブラムを筆頭にして、カイン、アベルと何人かの旧約聖書の登場人物たちをこのような信仰の範例として並べています。「ところが実際は、彼らは更にまさっ

た故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。神は、彼らのために都を準備されていたからです。」（ヘブル 11:16）と述べます。つまり、『聖書（旧約）』にある信仰の先駆者たちが示したことは、天の故郷であるという結論に続くのです。そして、そのことがイエス様を通じて明らかになったと述べるのです。そして同じ故郷を、今、キリスト者は望んでおり、またそこに至ると確信しているのです。

このように見ますと、本日の使徒書、「ヘブライ人への手紙」にある「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです**」という言葉は、『聖書（旧約、続編、新約）』全体を通して、「信仰とは何か」という問いに対する明白な答えであるといえます。もちろん、大切なことは、「信仰」と「行い」とを対義語として、二者択一的にとらえないことです。「信仰」とは、主なる神様に対する人間の応答すべて、人間の生き方そのものです。そこには思いも行いも含まれます。そして主なる神に帰依するという意味では、イスラムという言葉にもつながるものです。

しかしながら、このようにして、信仰生活を送った初代のキリスト者たちと、現代のわたしたちとは大きな違いが一つあります。それは現代のキリスト者であるわたしたちが、『聖書（新約）』を含めて、『聖書（旧約、続編、新約）』を読むのに対して、初代のキリスト者たちは、「旧約」のみが（おそらくは「続編」も含んで）『聖書』であったということです。初代のキリスト者たちは、『聖書（旧約）』のみで、イエス様について考え、主なる神様を信じていたのです。つまり、イエス様を知ることによって、主なる神様について、そして、『聖書（旧約）』について、今まで理解することができないことを、理解することへと変わったということです。もちろん、次第にイエス様についての物語やパウロの手紙などが流布し、それらが基礎になっていきますが、少なくとも「ヘブライ人への手紙」の著者やその最初の読者の時代は、『聖書』として基礎にあるのは「旧約」だけでした。それゆえに福音書の物語やパウロの手紙、そして様々な情報を知っているわたしたちが想像する以上に、イエス様を通して起こった出来事は本当なのか、イエス様を通して示された新しい約束は、大丈夫なのか、そういう不安や戸惑いがあったと思います。ことに、イエス様は、『聖書（旧約）』が示していたメシアとして、力を示して何かを達成した方ではなく、無力のまま十字架で死に至った方です。その方をメシアとして信じる、それは、理性で簡単には受け入れられない事柄であったと思います。現実を直視すると、決して信じられないような事柄です。その意味では、「ヘブライ人への手紙」の著者は、アブラムの時代と自分の時代が異なることを認識しつつも、しかし、同じ不安の中で、同じように勇気を出して希望をもって、「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです**」と断言したのだと思います。

さて、わたしたちが今、信仰を持つ時代は、アブラム・アブラハムの時代とも、「ヘブライ人への手紙」の時代とも異なります。しかし、「世界はどうか、日本はどうか」というような未来に対する言いようのない大きな不安が多くある時代です。ことに戦地は遠いのですが隣国が戦いをしており、わたしたちの国の近辺でも軍事的脅威が高まりつつあります。そして、アブラハムの時代はもちろんのこと、使徒書の時代と比べても、幻どころか、もっとはっきりと、それまでにない量の情報が与えられると同時に、テレビや新聞などは、起きていることをあえて報道しない、偏って情報を報道することも多くあります。それゆえに、何が今起きているのかがむしろわかりにくくなり、不安は増大しているといえます。しかも、冒頭に述べました通り、コロナ禍に猛暑と大雨、そして教会に雷まで落ちますので、現実を見れば見るほど、アブラハムのように不安になってしまうかもしれません。

そのような不安を増大させる事柄、あるいは、現実を見るがゆえに、希望を失ってしまうような状態、それらから、何が私たちを救ってくださるかという、それは、イエス様のお姿に他ならなりません。その中にある、愛と慰めの姿に他ならないと思います。それは、変わりません。そして、それは、増大する様々な不安に比べると、なんとも頼りないもののように思えます。しかし、人間が人間である以上、一人ひとりを大切に愛そうとされたそのイエス様のお姿に、本当の希望があることは変わらないのです。それは人間に対してだけではなく、自然に対しても同じなのだと思います。

本日は、福音書に触れることができずでしたが、そこで語られている内容は、「旧約日課」のアブラムのお話、そして「ヘブライ人への手紙」の内容とは少し異なっているようにも思えます。しかし、「**あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ**」(ルカ 12:34)という言葉は、人間が一番直視したがる現実の一つは、富であり、もしそこに目を奪われるとき、主なる神様の方を向くことができなくなってしまうことを告げています。その意味では、現実を直視したからこそ、主なる神様の約束を受け入れられなかったアブラムの姿、しかし、その現実を超えて信じるようになった姿、そして、そのアブラムの姿を模範とする「ヘブライ人への手紙」の言葉には、その福音書の示す内容と共通する点があると思います。逆に言えば、イエス様の言葉は、富に心を奪われなければ、いつでも主なる神様のほうを向くことができるかと語っているといえるからです。それは単純なことですが、一人の信仰・歩みではなかなか困難です。しかし、信仰の交わりがあれば可能となります。わたしたちの教会は、その信仰の交わりを生み出し深めるためにあります。これからも礼拝と交わりを通して、ご一緒に主なる神様の方を向き続けたいと思います。世界に主の平和が実現するまで、向き続けたいと思います。